

外国人は日本語のオノマトペを使えるの？

岩崎 典子

オノマトペは難しい？

オノマトペは日本語を外国語として勉強する人には難しいと言われている。筆者のデータでも外国語として日本語を学んだ韓国人が自分の見たビデオを描写しようとしている時にオノマトペを使おうとして、「パツ？クツ？何という、あー、これ僕一番難しいんですけど、日本語で何という、擬声語？それが一番難しいと思うんですけど」と戸惑うことがあった。オノマトペは語音と意味が関係しているため、その関係が恣意的である一般の語より容易に習得できそうであるが、本当に習得が難しいのだろうか。

一方では、オノマトペが習得しやすいことを示唆するデータがある。たとえばグウィリム・ロックウッド氏他による実証研究では、日本語のオノマトペを日本語学習経験のないオランダ話者に本来の意味（ウキウキ＝happy）、または、反意語（ウキウキ＝sad）と共に提示し、二つの条件を比較したところ、本当の意味を提示した場合の方がよく覚えることができた。さらに語音から意味を選ばせる二者択一課題（ウキウキ＝happy / sad¹、キビキビ＝energetic / tired）では、正答を選ぶ²ことが多いという結果が得られた³。

オノマトペの音形が意味に関係していることが未知の言語のことばを覚えやすくし、意味の推測も可能にしたと考えられる。

同様に、日本語の知識がまったくない英語話者でも日本語のオノマトペを聞けば、ある程度意味を推測することができる。筆者が共同研究者と行った調査では、日本語学習経験のない英語母話者にあらかじめ録音した日本語のオノマトペ（擬音語⁴）、（笑い⁵）の擬声語）、（痛み・歩み⁶）の擬態語）を聞いてもらい、どのような意味かをそれぞれのオノマトペに関係するいくつかの意味項目（「大きい音—小さい音」「鋭い痛み—鈍い痛み」

「口を大きく開けてー口を閉じて」「大またー小また」など) について七段階で判断してもらった。その結果を日本語母語話者の判断と比べたところ、英語話者も日本語母語話者と同じく、反復のあるオノマトペ (例えば、カチャカチャ、ズキズキ) は長く続く音や長く続く痛みを指すこと、母音[ɔ]を含む笑いの擬声語 (ワッハッハ、カラカラなど) が大きく口を開けて元氣よく大きな声で明るく笑う様子を指すこと、濁音を含む擬音語 (ガチヤン、ボトン、ゴトゴトなど) が重いものや大きいものがたてる音を指し、濁音を含む歩みの擬態語 (ドシドシ、ドタバタなど) が大きい人が歩いている様子を指すことなどを推測できた。このことは、日本語のオノマトペに言語共通の音象徴の要素が含まれていることを示している。特に笑いの擬声語は語音が意味に類似しているため推測しやすく、例えば「クスクス」は、英語話者も「口を閉じたまま抑えた感じの女性的な小さな声の笑い」を指すと判断していた。そういうことなら、日本語のオノマトペの習得はやさしそうだ。

ところが皮肉なことに日本語のオノマトペを聞いて言語共通の音象徴に基づいて感覚的に意味を判断できるのは、日本語を学習したことのない外国人に限られる可能性がある。内藤由香氏は、浜野祥子氏が唱えた「口蓋化の音象徴」が日本語特有のものなのかどうかを検証するために、日本語母語話者、日本語の初級学習者、日本語学習経験のない英語母語話者の三グループを対象に調査を行った⁽³⁾。「口蓋化の音象徴」とは、舌を口蓋に向かつて盛り上げて調音する音 (キヤ、チョ、ピュなど) を含むオノマトペが、コントロールできないさま (例えば「子どもつぼさ、制御できないエネルギー、不安定さ、未熟さ、信頼性の欠如、ぎこちなさ」など) を表すというものである。被験者は、既存の日本語のオノマトペをもとに作られた、口蓋化音を含む新オノマトペと含まない語のペア (たとえば、シャロシャローサロサロ) のどちらかを聞き、提示された絵のペアからその語が指しうる様子を描いた絵を選ぶよう指示された。その結果、日本語学習経験のない英語話者は日本語母語話者と同じく、口蓋化を含むオノマトペの意味として、制御できないエネルギーを描く絵 (例えば、水が飛沫をあげて吹き出している) を選ぶ傾向があったが、日本語

学習者の絵の選択には口蓋音の有無は影響しなかった。内藤氏はこの結果から、口蓋化の音象徴が英語話者も共有する音象徴であることを示唆しているものの、日本語学習者はあえてその感覚を使わずに、学習した日本語の音声的知識に基づいて判断しようとしたがために、口蓋化音の意味合いを知覚できなかったのではないかと論じている。

さらにエリノア・ジョーデン氏も指摘するように、オノマトペには母語話者が慣習の蓄積によって獲得する文化特有の言語音と意味の関連も含まれている。前述の筆者の調査でも、特に情意的な意味合いの判断（気持ちいい音、きれいな音、または、上品な笑い、快い声の笑いなど）は、日本語学習経験のない英語話者と日本語母語話者の間で反応が大きく異なっていた。例えば、擬音語「チャポン」は、日本語母語話者にとっては「少量の液体など自然のものがたてる快く美しい、静かで響く音」であったが、英語話者にとっては「乾いた人工的な大きな個体がたてる不快で汚い、大きい響かない音」であった。

感覚と無関係の一般語彙（たとえば「つくえ」や「ネコ」）の習得が、単に語音に対して恣意的に与えられた意味を覚えることであるのに対して、オノマトペを習得するには、言語に共通する感覚を生かしながらも、日本語オノマトペの知識を蓄積して文化特有の感覚も獲得する必要がある。このことが、オノマトペの習得を一般語彙より難しくしている、あるいは難しいという印象を与えていると考えられる。

オノマトペが使え、るといふのはどういうことか

実証研究は少ないものの、日本語学習者がオノマトペを使うのは難しいという結果も出ている。中石ゆうこ氏他が、日本在住の中国語を母語とする上級日本語学習者十名を対象に、二つの課題を用いて行った調査の結果である⁽⁴⁾。アニメーション課題では、三十九語のオノマトペの意味を示す動画を見て、思いつくオノマトペをキーボード入力し、作文課題ではその三十九語のそれぞれのオノマトペを実際に使って一文ずつ作文した。その結果、各課題の正答率は二十四・四%、二十八・七%に過ぎなかった。すでに日本語能力検

定一級を取得している高いレベルの上級学習者で、しかも日本在住である被験者の正答率がこれほど低いということは、日本語学習者にとってオノマトペを使うのはやはり難しいのかもしれない。

しかし、オノマトペを使える、というのはどういふことなのかを考えてみる必要がある。まずは、ここで用いられた正答率の算定基準に注目したい。アニメーション課題の「正答」は動画作成時に想定された一つのオノマトペに限らず、同じ課題を遂行した日本語母語話者二十二名の回答にあつた全ての語を正答としていた。用いられた三十九の動画のうち、日本語母語話者の八割以上が同じオノマトペを用いたのはたった六つであつたということから、日本語母語話者が様々なオノマトペを用いていたことがわかる。つまり、同じ動画の描写をするのに正しいオノマトペ一語を特定することができないのである。二十二名の日本語母語話者が使っていなかったために「誤用」と判断されたオノマトペの中にも、使つてもおかしくない（ちよつと創造的な？）オノマトペもある。例えば、「ニコニコ」を意図した動画（首を左右に動かしながら満面の笑顔で笑っている男性の顔）で正答とされたのは、「ニコニコ」や「ウキウキ」だったが、中国語母語話者はこれらの正答の他に、「ワクワク」、「わあい」などと入力していた。また、日本語母語話者十八名が「ポイポイ」と回答した動画（男性が箱から次々にものを投げ捨てる動画）に「ポイポイ」を入力した中国語話者はいなかった。しかし、一名ずつが用いた「メチャクチャ」「ポンツ」というオノマトペは使い方次第では自然である。「部屋をメチャクチャにしている」「何かポンツポンツと放り投げている」などは同じ場面を描写する日本語として不自然ではない。アニメーション課題ではオノマトペ一語の回答を求めただけで、オノマトペを文や発話の中で使わせたわけではなかった。このため、学習者がどのように使うつもりでそのオノマトペを入力したのかはわからない。

興味深いのは、「ポイポイ」が期待される動画に中国語話者がだれ一人「ポイポイ」と回答しなかったものの、実はこの中の二名はこのオノマトペを知っていたという報告であ

る。彼らは作文課題において、「子どもはおもちゃをあっちこっちにポイポイ捨てる」「妹はポイポイとテーブルにある紙を捨て、あつというまに部屋が紙屑だらけになってしまった」のように使っていたという。ことばも知っていて、「捨てる」という動詞と一緒に用いられることが多いことも知っていたのである。では、この二名は「ポイポイ」を使えるのか、使えないのか。彼らは、少なくともことばを与えられて作文する課題ではオノマトペを使えると言っただろう。では、自然発話ではどうであろう。日本語学習者はオノマトペを自発的に使えるのだろうか。

母語にオノマトペが少ない外国人、母語にオノマトペの多い外国人

外国人が日本語のオノマトペを自発的に使えるかどうかは、その外国人の母語にもよる可能性がある。一般に、第二言語の習得や使用には母語が影響することが知られているからだ。たとえば、清音と濁音の区別を持たない中国語や韓国語の母語話者は、日本語の「谷ーダニ」などの区別が苦手である。英語にはオノマトペは比較的少なく、文法的にも動詞として使われることが多いため、日本語とは様相が異なる。一方、韓国語にはオノマトペが多く文法的にも副詞として使われるため、日本語と似ている。では、韓国語母語話者の方がオノマトペを使い慣れているから、英語母語話者より日本語のオノマトペをより多く使うのだろうか。

この疑問に答えるために、筆者はまずKYコーパスというデータを見てみた。コーパスというのは一般に言語データを集めたものだが、このKYコーパスは略してOPIと呼ばれる、目標言語を話す能力を判定するためのインタビューを書き起こしたもので、研究目的で使用する研究者に提供されている。このコーパスには、英語、中国語、韓国語を母語とする日本語学習者について、話す能力が初級（五名）、中級（十名）、上級（十名）、そして超級と呼ばれる高いレベル（五名）に判定された各母語グループ三十名ずつのイン

タビュールが含まれる。インタビューでは趣味、出身地、旅行経験などの日常的内容の他に、レベルによっては社会問題などについて自発的な発話が促される。

このコーパスを使って、英語母語話者と韓国語母語話者の三十名のインタビューで使われたオノマトペを集計したところ、英語話者、韓国語話者のどちらのグループでも中級以上の話者が十七名ずつオノマトペを使っていて、実際に使われていたオノマトペの数は英語話者の方が多かった。意外な結果である。しかし、コーパスの性質上、すべての話者が同じトピックで話したわけではないため、正確な比較のためには同じ課題を用いて調べる必要がある。このために筆者は、同じ場面を英語母語話者と韓国語母語話者に描写してもらう別の実験（次節）を行ってみた。

日本語母語話者 クルクルクルって転がって（？）

オノマトペは他のことばと違い、そのオノマトペを必ず使わなければならない状況・文脈がまずない。そもそも日本語母語話者は、どのような時にオノマトペを自発的に使うのか。筆者は日本語母語話者の多くがオノマトペを使って描写するビデオの場面を選ぶために、世代や地方による使い方の違いも考慮し、日本生まれ日本育ちの東京在住の二十一名の大学生に、アニメ『ルーニー・テューンズ』（トゥイーティのキャラクターで知られるアニメ）の場面をいくつか見せて描写してもらった。このうちここで紹介するのは、日本語母語話者が最も多くオノマトペを用いた場面で、しかも、英語母語話者、韓国語母語話者のどちらの学習者も最もオノマトペを多く使った場面である。

それは、シルベスター（黒いネコ）がトゥイーティ（黄色いトリ）を捕まえようとして排水管の中をよじ上っている時に、トゥイーティが上から排水管に入れたボウリングの玉を飲み込んでしまい、排水管の中から飛び出して坂を転がり落ちる場面である。（その後、シルベスターはボウリング場に突入して、ピンが倒れる音が聞こえる。）シルベスターが転がり落ちる滑稽な様子がオノマトペの使用を誘引したようだ。

日本語母語話者のこの場面の描写は実に様々で、例えば(1)や(2)のようにオノマトペなしで描写する人もいれば、(3)～(6)のようにオノマトペで描写する人もいた。使われたオノマトペのうち、(5)の「クルクル」は転がる様子というより同じ場所で回る様子をあらわすオノマトペということになっているのだが、そんなことはおかまいなしに使っている。

- (1) その坂道をボウリングの玉が転がるように転がって行って
- (2) そのバランスを崩したネコは坂道を下って行って
- (3) そのちよっと行ったところが下り坂で、ま、下り坂でピューって落ちて行って
- (4) 猫は下に落ちてって、ゴロゴロゴロゴロって落ちて坂を下ってって
- (5) それがお尻までまわって、こうクルクルクルクルって転がって
- (6) すぐ坂になっているからウワァッって下ってって、アアァァって下った

(1) から (6) で注目したいのは、日本語母語話者もオノマトペを使わないことがあり、使う場合でも様々なオノマトペを使うということである。しかも、辞書の定義から判断すると不適切だと思われるオノマトペも使っている。ということは、外国人がオノマトペを使わないからといって、必ずしもオノマトペを使えないとは言えないことになる。

外国人がオノマトペを使った例 コロンとしてドーン！

シルベスターが転がり落ちていく場面を、ロンドン在住の英語母語話者十三名と、ソウル在住の韓国語母語話者二十四名にも日本語で描写してもらった。このうち、英語話者（中級十名、上級三名）とほぼ同等のレベルの韓国語話者十八名（中級十一名、上級七名）の描写を分析したところ、オノマトペを使った英語話者は十三名のうち四名に過ぎなかったが、韓国語話者は十八名のうち十五名がオノマトペを使っていた。韓国語話者の場合、

韓国語に「ゴロゴロ」に相当する「데굴데굴（テグルテグル）」というオノマトペがあることも使用を手伝ったと考えられる。ただし、他の場面の描写では大きな違いはなかったため、すべての場面で韓国語話者の方がより多くのオノマトペを使うというわけではなかった。この場面の描写では韓国語話者の方がオノマトペを多く使っていただけでなく、母語によって使い方が異なることもわかった。

まず、韓国語話者のオノマトペの使い方を見てみよう。(7)と(8)は韓国語話者の発話である。日本語母語話者の(3)～(6)でオノマトペが副詞として使われているように、韓国語でもオノマトペは副詞として使われることが多いはずだが、(7)と(8)では、オノマトペが「する」を伴う動詞（以下、スル動詞）として使われている。オノマトペを使った十五名のうち「グルグル／ゴロゴロ」を使ったのは十名で、うち六名がスル動詞として使っていた。

(7) ネコも一緒に**コロコロ**しながらボウリング場に入ります。

(8) そのボウリングボールのせいで道をネコは**グルグル**してボウリング場に入って

英語話者も(9)のように「コロコロ」や「コロ」と「スル動詞として使っていた。

(9) **コロコロ**して、で、その坂の下にボウリング場がありました。

ネコがボウリング場に**コロ**ンとして**ドーン**！

一見、似たような使い方をしているようだが、よくみるとスル動詞の意味がちよつと違う。

(7) (8)の「ゴロゴロする／グルグルする」と(9)の「コロコロする」の意味の違いが分かるだろうか。(7) (8)では移動の方向は動詞「入る」が示し、スル動詞は転がる様子だけを指しているため、単純に「転がりながら／転がって」と置き換えることもできる。一方、英語話者の(9)の場合は、移動方向を表す動詞を使う代わりに、オ

ノマトペのスル動詞で移動方向と移動の様態のどちらも示しているようで、「転がり落ちて」で置き換えた方が妥当ではないだろうか。英語の roll down の意味に類似している。

「コロンとして」も同様に移動方向を含んでおり、「転がって入って」のような意味が含まれている。

どのような意味にしろ、この場面の描写のために「ゴロゴロ／グルグル／コロコロ／コロ＋する」という表現を使う傾向は日本語母語話者には見られない。とするとこのような使い方は誤用なのだろうか。しかし、そもそもオノマトペは通常語彙よりも自由に使えることばである。それなら、こういう使い方があっていいのではないだろうか。

もう一点、韓国語話者と英語話者で異なっていたことがある。（9）でもそうだが、

（10）の例にも見られるピンを倒す音を指す擬音語である。英語話者は韓国語話者より積極的に擬音語を使っていた。

（10） 猫はボールの中があります。ボールはコロコロコロ、

あ、ボウリング場へ行きます。プウーン！

読者の皆さんは（7）から（10）の例をどう評価するだろう。シルベスターの転がる様子、ピンの音の描写から場面を想像できただろうか。できたとしたら、外国人も日本語のオノマトペを使え、表現力が豊かだと言えるのではないだろうか。

日本語能力の高い外国人ならオノマトペを使える？

母語以外に何がオノマトペの使用に影響するのか。まず考えられるのは日本語能力の影響である。この問題は先に取り上げた「オノマトペが使える」とはどういうことかという問題にも関わるが、日本語能力が高くてオノマトペをあえて使わない外国人は少なくな。むしろ、日本語能力が高からこそ使わないのではないかという場合もある。前述の

分析では中級と上級の話者のみ対象にしたが、韓国語話者には日本語の超級話者や超級に近い上級上というレベルの人もいた。実は、最も日本語能力の高い超級話者はまったくオノマトペを使わず、上級上の話者もほとんど使わなかった。日本語能力が高く、オノマトペを知っているにもかかわらず、表現したい意味にぴったりのオノマトペを使うことの難しさからあえて使わないか、場をわかまえるきちんとした日本語の使用を目指しているために、オノマトペを子どもっぽい、またはくだけすぎていると思っただけで避けている可能性がある。

オノマトペは喜多壮太郎氏も唱えるように、意味が感覚や情意に直接関わる特殊なことばである。一般語彙の知識や使用は日本語能力のレベルと大きく関係すると考えられるが、オノマトペの場合は違うようだ。第二言語習得研究では、ジャン・マルク・デワレー氏とアナタ・パブレンコ氏が感情語彙の使用にどのような要因が影響するかを報告しているが、感情表現を使うかどうかには、その話者の性格も影響し、外向的性格の人の方が、積極的に使う傾向を示すそうである。オノマトペの場合も、使うか使えないかはその話者の性格や好みが大きく影響するのかもしれない。

日本語母語話者でもオノマトペをあまり使わない人もいる。使い方も様々で、時には普通とはちよつと違う使い方もする。外国人の場合、日本語能力がどんなに高くてもあえて使わない人もいれば、中級レベルで楽しそうに使う人もいる。教科書にあるような使い方もあれば、本人が独創性を意図したかどうかにかかわらず、外国人がちよつと違う、使い方をすることもある。そんなとき、必ずしもそれを「誤用」とは言えない。それゆえ、標題の答えは、「外国人も(使う気にさえなれば)オノマトペを使える」である。

参考文献

- (1) Lockwood, G., Dingemans, M. & Hagoort, P. (2016). Sound-symbolism boosts novel word learning. *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition*, 42(8), 1274-1281.

- (2) 岩崎典子・デイヴィッド・ヴィンソン・ガブリエラ・ヴィリョコ (2005) 「擬音語の感覚―英語母語話者と日本語母語話者のとらえ方の比較―」『言語学と日本語教育』第4巻 233-246. （紙幅制限のため他の関連文献は略している）
- (3) 内藤由香 (2013) 日本語の擬音語・擬態語知覚―母語話者、学習者、非日本語話者の比較から― *Educational Studies*, 55, 293-301.
- (4) 中石ゆうこ・佐治伸郎・今井むつみ・酒井弘 (2011) 「中国語を母語とする学習者は日本語のオノマトペをどの程度使用できるのか―アニメーションを用いた産出実験を中心として―」『中国語話者のための日本語教育研究』2, 42-58.

【コラム オノマトペと翻訳】

日本語に限らずオノマトペの翻訳は難しい。アフリカ諸言語のオノマトペも翻訳が難しいという。長谷川葉子氏の『日英・英日翻訳講座』によると、日英翻訳で日本語のオノマトペが英語のオノマトペに訳されることはまずないということだ。代わりに「ブラブラ歩く」のような日本語の「オノマトペ＋動詞」が英語では“stroll(さまよう)”のように動詞だけになるなど、品詞が変わることも多い。虎谷紀世子氏は、日英翻訳の方策は言語類型などを考慮すると多くは説明できると論じる。とすると類型が同じでしかもオノマトペの多い韓国語訳なら、オノマトペを使っているに違いない。吉本ばなの『キッチン』の英訳（ミーガン・バツカス氏訳）と韓国語訳（キム・ナンジュ氏訳）の例を見てみよう。

まず、最初のオノマトペは「白いタイルがピカピカ輝く」だ。これはきつと英語では sparkle (きらめく) のような動詞に訳されていると思いきや、なんと音を表すオノマトペが使われている。“White tile catching the light (ting! ting!)”（白

タイトルが光を受け、チリンチリン！）。韓国語の方は予想どおりオノマトペが使われていた。반짝반짝 빛난다.（パンチャックパンチャック輝く）。しかし、日本語の「ピカピカ」とは音的にずいぶん違っている。実は韓国語のオノマトペには日本語の対訳オノマトペに音的にそっくりなものとかかなり違うものの方が存在するが、「ピカピカ」「キラキラ」の対訳である「パンチャックパンチャック」は後者の代表例である。

もう一つ様態を表す例として「ぼろぼろと涙をこぼした」を見てみよう。案の定、英語ではオノマトペは使われていなかった。英語では、「涙」を主語にして、*“his tears fell like rain”*（涙が雨のように流れ落ちた）としていた。韓国語訳は、構文は日本語とそっくりなのだが、またしても音声はかなり異なるオノマトペを用いている。눈물을 똑똑 흘렸다.（涙をトウツクトウツク流した）。この韓国語オノマトペを辞書でみると、「ポロポロ、ポタポタ、ボタボタ、ポキンポキン、ポキポキ、トントン」など様々な和訳が並ぶ。日本語を母語とする韓国語学習者にはつらいところだ。

音を表すオノマトペなら、似たような音声で模倣していてもよさそうなものだ。例えば、「冷蔵庫のぶん」という音が…はどうか（筆者には冷蔵庫がブーンとというのは意外ではあるが）。予想通り英語でも韓国語でもオノマトペが使われていた。英語では*“The hum of the refrigerator…”*で、韓国語では、*“위잉”*, *“빙장고 소리가…”*（ウィーイン、冷蔵庫の音が…）だ。英語の*“hum”*は蜂や機械のブンブンという音を指す語彙として確立しているオノマトペ、韓国語の場合、

「ブーン」の辞書の対訳は위잉（ウオンウオン）であるので、「ウィーイン」は、新造語だと思われる。どちらも「ブーン」とはかなり違う音声なのだが、前者は

慣例的にブンブンという音をそのように指してきた影響でそう表現し、後者は機械音を主観的に捉えて音声化したものだろう。筆者には冷蔵庫の音が“hum”のようには聞こえないが、「ウイーン」とは聞こえるような気もする。何語に翻訳するにしてもオノマトペの翻訳は難しそうだ。翻訳者の方々に敬意を表したい。